

電子カルテの視点からベッドサイドを覗き見る

増井伸高

札幌東徳洲会病院救急科

YouTube で尊敬する医師が「私の診察 Live!」という動画をアップしていたら、脊髓反射でクリックしてしまいます。しかし、そんなチャンネルはないのが現実世界です。ないものネダリでも、優秀な臨床医の「リアルな診察室のやりとり」や「カルテに何を書いているか」といった生々しい現場を、覗き見たいという衝動に駆られます。

そんな診察室のリアルワールドをなんとか誌面に落とし込めないか？ むしろ雑誌だからこそ動画以上に伝わる世界観もあるのではないかな？ そんな思いで生まれたのが今回の特集企画です。

企画成功のカギは、優秀な臨床医を執筆陣に揃えること。そこで私が（きっと皆さんも）診察室やカルテを覗きたくなる総合診療医にアプローチしました。結果として、今回の目次（p.1220）には「オールスター・メンバー」がずらりと揃うことになりました。

そして執筆にあたっては、各症候や病態で次の3点を言語化するようにお願いしました。

- ① コンサルト症例で、電子カルテのどこを確認しているか（または、あえて見ないで診療しているか）？
- ② 確認後にベッドサイドで、どのような点に注意して診察しているか？
- ③ 診察後のカルテ記載は？（具体的に！） 特に言語化が難しい患者情報を、どのように記載しているのか？

普段している診療を「電子カルテ」という視点



に立って、とことん解説してもらったのです。この時点で各論を読みたくなった方は、こんな前置きは放っておいて先のページへ進んでください（私が読者なら、きっとそうします）。

ページをめくるとあら不思議、まるで配信動画で彼らの診察室を覗き見ている感覚に陥ります。しかも、この動画には彼らの思考過程がテロップで流れてきます（嘘のようですが、本当にそうなのです）。私は集まった原稿を読みながら、彼らの診察室に透明人間になって入ったような感覚になりました。さらに診察室の空気感や熱量までもが文字を超えて伝わってきて、ページをめくる手が止まらなくなりました。

おっと大事なことを忘れていました。今回は実際にカルテの文字数や、タイピング時間、テンプレート利用率や、過去のカルテのコピペの是非などについてもインタビューしています。この辺りは医師の働き方改革もあって、みなさんは興味津々でしょう。

若手医師には、日本有数の総合診療医の診察風景は新たな発見の連続になるはずです。または同業者の診察室に入りにくい中堅医師が、こっそり読むにはもってこいの内容になっています。教育熱心なベテラン医師にとっては若手医師指導のスキルアップに直結します。達人たちが電子カルテとベッドサイドを往来する診療風景は、みなさんも間違いなく真似したくなりますよ。